

## ジェンダー主流化とダイバーシティ

江原 由美子

近年、日本社会ではジェンダー平等施策に、ダイバーシティという語を使用する名称を付すことが多くなっている。性別だけでなく年齢やセクシュアリティ、文化的多様性など、他の多様性に関しても平等を実現すること、さらにはそうした「多様性の尊重」施策が組織やコミュニティ、社会全体にとって肯定的な効果があると主張することで、ジェンダー平等施策推進に対する理解を得たいということが、主な理由らしい。

私自身、ダイバーシティ推進等の施策にかかわってきたが、このダイバーシティという語への変化に戸惑うことがある。ダイバーシティという語は、日本社会では、「ジェンダー主流化」に対する理解が進まないゆえに採用されているのではないかと、疑心暗鬼になるのである。「ジェンダー主流化」は、あらゆる分野でジェンダー平等を達成するための手段をいう。一見、中立的にみえる施策や事業でも、男女に異なった影響をもたらす。ジェンダー平等実現のためには、すべての政策・事業の企画立案段階から、ジェンダーの視点でニーズやインパクトを明らかにしていくことが必要である。けれども、日本社会でこのような意味で「ジェンダー主流化」を主張すると、しばしば誤解に基づく反発にさらされる。「ジェンダー平等だけが重要なわけではない」「性別以外の多様性は無視してよいとでもいうのか」などである。「すべての施策や事業をジェンダー視点で見直す必要がある」ということが、どうも「ジェンダーだけが重要だ」と主張しているという誤解を生むらしい。だからこそ、今、ダイバーシティという語が選好されているのではなかろうか。

ダイバーシティ推進に変えることで「ジェンダー主流化」への理解が促進されるのならば、それは歓迎すべきことだろう。けれどもそれは単に、日本社会におけるジェンダー平等実現に立ちはだかる壁の険しさを示しているだけではないかと考えるとき、複雑な思いになるのである。



### PROFILE

えはらゆみこ：1952年横浜生まれ。横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授、日本学術会議連携会員。専門分野は社会理論、ジェンダー研究。著書に『ジェンダー秩序』（勁草書房、2001）、『ジェンダーと社会理論』（共編著、有斐閣、2006）、『ジェンダーの社会学入門』（共著、岩波書店、2008）など。